

「夫婦ゲンカの中で

自分の罪を知る」

かねなり みちたか

在口サンゼルス 金成 通孝

(ローリングヒルズ・カペナント教会)

●レスリーとの結婚

私と妻レスリーは、1989年ニューヨークで出会いました。私は日本経済新聞社の子会社であるクイック・コーポレーションという金融情報会社に、レスリーは住友銀行系列の明光証券に勤務していました。

「絶対に顧客の女性に手を出してはいけない」

上司から厳しく言われていたその掟を私は見事に破ってしまいました。ふたりの勤務場所が同じビルにあったのです。ニューヨークのウォール街にある30階建てのビルで、彼女の明光証券は18階に、私のクイック・コーポレーションは25階でした。

彼女は、用事もないのでよく私の会社に来ました。私の会社の受付嬢が彼女の友達で、ときどき受付嬢からインターホンで、「金成さん、お客様ですよ!」と連絡が入りました。行ってみると、用事もないのでレスリーが来ているのです。

ですから、ふたりのデートは、すぐに上

司にバレました。私の上司は部下の面倒見の良い人でしたので、「金成君、遊びで付き合っているのだったら、今すぐに止めなさい」と言ってくれました。

「いえ、私は結婚を前提に付き合っているので、そういうわけにはいきません!」。

こう答えましたが、実を言うと、そんな大げさなことは考えていませんでした。でも言ってしまうから、本気で結婚を考え始めるようになったのです。

そしてある日、海岸の崖の上にある非常にロマンチックな雰囲気のレストランで食事しました。

「僕と結婚してくれない?」。

その時、私は勇気を出して彼女にプロポーズしたのです。

「リングはどこ?」

「しまった〜!」と思いましたが、そんな態度はおくびにも出さず、「ちゃんと用意してあるよ!」と言って、その場をごまかしました。彼女の反応から、「イエスだ!」と確信し、心が躍りました。

数ヶ月後、母の形見のエメラルドの指輪を彼女にあげて、「これで、どう?」と尋ねると、「いいわ。結婚してあげるわ!」と言ってくれました。1990年7月20日、ふたりは晴れて結婚したのです。

甘い甘いハネムーン生活が3年間続きました。彼女のアイデアで、よく旅行に行きました。

「子どもができるとなかなか旅行に行けなくなるので、今のうちに良い思い出をたく

さん作りたい」という彼女の願いでした。

日本、カンクーン(メキシコ)、サンフランシスコなどを旅行しました。彼女の言ったとおり、本当に良い思い出になりました。

●陰悪な関係に

1993年7月に、長女グレースが生まれました。その頃から生活パターンが変わり、ふたりの関係がギクシャクしてきました。実は、1992年にニューヨークから口サンゼルスに引越し、私は全く業種の異なった仕事に就きました。引越し、新しい仕事、長女誕生と、短期間のうちに3つの大きな出来事があったため、ふたりとも非常に疲れて、ストレスが溜まっていたのだと思います。よく口論しました。

『愛は盲目』とはよく言ったもので、ハネムーン時代には相手の長所しか見えませんでした。愛が冷めてくると、相手の欠点がよく見えるようになり、それに対してお互いに我慢できなくなったのです。『憎しみは盲目』の時代が始まり、相手の長所が全く見えなくなりました。欠点ばかり見て生活すると、人間関係は絶対に悪くなります。

もはや自分たちの手には負えなくなり、ふたりでカウンセリングに行きました。カウンセリングは、レスリーが言い始めたことです。私が同意したのは理由がありました。「これを通して、彼女が自分の間違いに気づき、変わってくれるだろう」と期待したのです。後で学んだことですが、これは大変な間違いでした。

カウンセリングは週に一度、45分か50分間で、毎週欠かさず行きました。

カウンセリングに興味を沸いた私は、日本語の本を数冊入手し、自分でも勉強しました。私の良い結婚復活の恩人、デニス・レイニー氏の「ファミリー・ライフ・ツデー」や、ジェイムズ・ドブソン博士の「フォーカス・オン・ザ・ファミリー」などをラジオからテープに録音し、何度も聞きました。最悪の場面を避けるために必死に努力しました。その時に学んだことは今でも大きく役立っています。

●トイレのドア損壊事件

当時の私は、大きな勘違いをしていました。それは、学びを通して妻を変えようとしたことです。カウンセリングや本を通して、次のことを学びました。

「私は、他人(妻)を変えることはできない。私ができることができるのは、自分だけである。私が変わると、他人(妻)も変わる」これは真理です。でも、私がこれをもっとするのには時間が必要でした。

カウンセリングを受けていながらも、私はいつも、「自分が正しく、妻が間違っている」と思っていました。妻も、「自分が正しく、夫が間違っている」と思っていたので、ふたりの関係はますます悪化していきました。口論でイライラした時など、イスや壁を蹴って、足の親指を骨折しそうになったことが数度。(以下略)